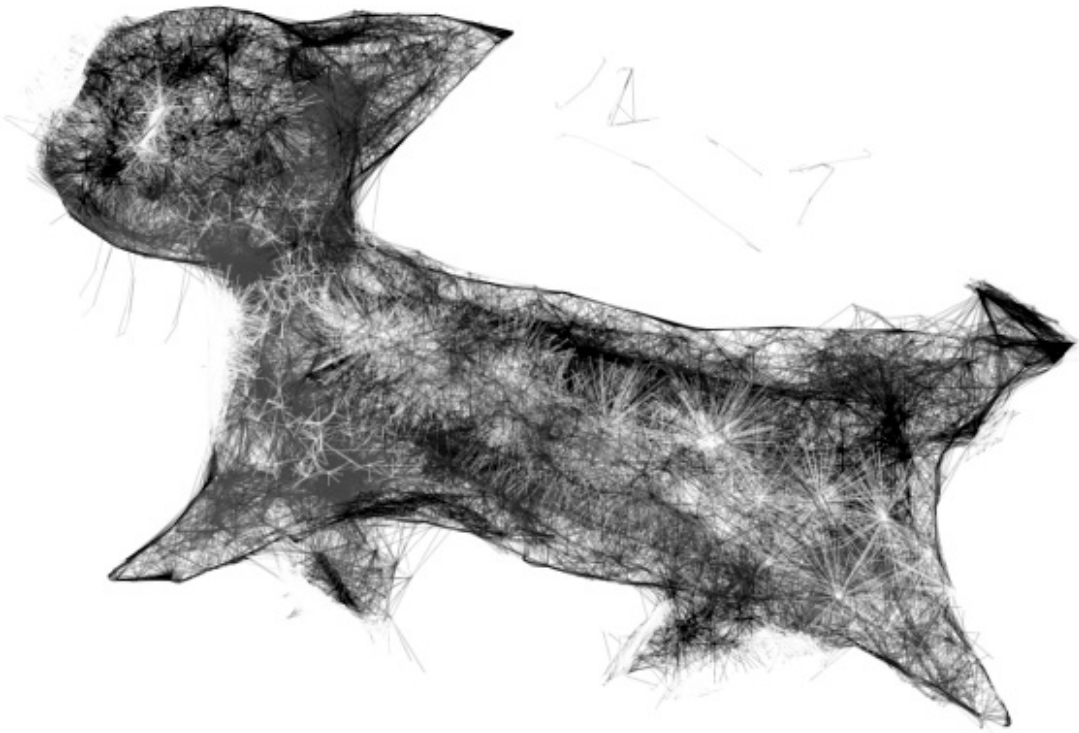

僕らがルーイについて語ること。

「僕らの『家』というのは、ストリップ大通りにあるクリスタル・フェニックス・ホテル・アンド・カジノなんですよ。ルーイはそこを根城にしているんです。彼がどうやってここにきたのはわからないがーー」(*0)

「ルーイ？」
「ミッドナイト・ルーイよ」ブロンドの女性が補足した。「あの子の名前」
「真夜中のルーイか。彼はきっと夜更かしさんなんだろうね(*1)」
「ルーイは『彼女』(*2)だよ」
「だったらルイーズ(*3)だ」
「それでもやっぱりルーイなんだな。真夜中は曖昧だから(*4)」
「ルーイはネコなのかい」
「死んでいるネコじゃないことだけは確かだ(*5)」
「私にとっては」またブロンドの女性(*6)が口を挟んだ。「またあのカワイイカギしっぽ(*7)を観測するまでは生きてるのか死んでるのかもわからないわ」
「そういうレトリックはきらいだな」
「私はあなたが嫌いよムッシュ」
「だってさ、ルイ*8」

午前4時13分ごろ、地震がありました(*9)。

「ルイはフランス人で、昔サッカーの代表選手だったこともあるのよ」
「すごいね。イブラヒム・バ(*10)のパスを受けたんだ」
「いや、僕はオクシタニア(*11)の代表だったから……」
「オクシタニア？」
「FIFA(*12)には認められていない地域さ」
「ルーイもそこで生まれたのかい？」
「あいつはオック語(*13)を喋るだろう？」
「アルビジョワ十字軍(*14)で殉教した二十六聖人(*15)の中に愛猫家もいた事実は案外知られてない。ルーイは聖ルイ(*16)の飼い猫の子孫」
「あんなスペインだかカタロニア(*17)だかわからない地方に聖人なんていないわ」
「ところがネコは世界中、どこにでもいるんだ(*18)」
「真夜中なら、いつでもね」
「極夜(*19)では死に絶えるのだね」

「地震がさまよっているわ(*20)」

「きっとそれが21世紀ってことなのよ」
「未来ね(*21)」
「未来だけど」
「神は死んだの？　じゃあ猫は？」
「ルーイがいるわ。ルーイ・ザ・真夜中キャット」
「カギしっぽなの？」
「あなたがそう信仰するのならね(*22)」
「ストリップ通りをすぎれば、4時も半を回るよ」

[*注釈一覧*]

*0 黒猫ルーイ、名探偵になる (ランダムハウス講談社文庫)よりの引用だが、以下に続く物語がまるごと引用かといえば、そうじゃない。

*1：ネコが夜更かしだなんておかしな言い回しだって。だって彼らは夜行性、夜が昼なんだから

*2：上で紹介した本の内容とは一致しない。おそらくは

*3：そういえば、フランスにはこの名前を冠した悲劇のお妃がいたけれど、さしあたってアメリカのルーイには関係ない

*4：疑問に思われる方は、夜の海を参照してもらいたい

*5：断言。彼が超能力者か感応者でもないかぎり、ルーイの生死について言及するのは避けた方が科学的だ

*6：第三者。これは、一人ともう一人と彼女が語る、一匹あるいは多数のネコの物語

*7：長崎のネコはたいていシッポが曲がってる。理由はわからない

*8：どうやら、それが一人の名前であるようだった。しかし、「ルイ」が彼女であるか、彼であるか確かめる術はない。忘れないでいただきたい。この場ではルーイはメスなのである！

*9：6月の29日の……東北地方だ

*10：元フランス代表のDFだったかMFだったかだ。名前がいいだろう？　誰でも一目でファンになる

*11：フランスの南部。異端の地だ

*12：国際的なサッカーヤクザ。入った得点を入ってないことにして、あとで謝る裏技が許された唯一のスポーツアソシエーション

*13：フランス南部の方言。異端の言葉だ。これ以上は知る必要もない

*14：悲劇！

*15：そんなやつらいたかな？

*16：愛猫家の守護聖人

*17：二つは違う国なんだよ。と、民族主義者は言うだろう。ぼくらには至極どうでもいいことなのだが

*18：北極は？

*19：白夜の反対

*20：彼女はおそらく、ナマズをみたのだろう

*21：同時に現在でもあり、過去だ。

*22：信じるものはネコの生死も決められる

ルーイとベネットさんちのアイスクリーム

　真夜中のルーイはアイスクリームがお好き。
　バナナ・アンド・ストロベリイやミントもいいけれど、一番はやっぱり香り高いヴァニラ。
　舐めただけでピリピリする冷たさ。
　とろけるような甘さ。
　おいしいおいしいヴァニラ・アイスのために、ルーイは今日もベネットさんの家に忍び込む。

　ルーイ、あなどることなかれ。
　ベネットさんちのアイスクリームは凶暴だ。なにせ、前の戦争のために訓練された軍用氷菓たちだから。
　物音一つに敏感に反応し、ドライアイスの刃を飛ばしてくる。
　地上最強のアイスクリームを我らが黒猫はどう攻略するのか。

「踊ればいいのさ」
　と、ルーイなら答えるだろう。
　月のない晩は彼の独壇場だ。
　黄金色の双眸は、地上に降り立った双子の満月。

　右、左、右、右、上、くるりと回って、飛んで、右。
　夢をみたんだ。
　ルーイが狂い踊る、そんな夢を。
　牙を抜かれたアイスクリームたちは、四ツ足でステップ踏む闇の内部へ溶けていく。

　伏せて、飛んで、かわして反転、右、左、右、左。
　狂いルーイ、ラクトースに溺れてなんとまぁだらしのない表情をしているんだろう！
　まるでマタタビに淫するネコみたいだ。骨抜きになって、油断しきっている。
　右後方の死角から、ラスプベリー味のするどい一閃が飛んでくるとも知らず。

　ところが、ラスプベリーの乾坤一擲は無情にも回避される。
　軽やかに、鮮やかに、そして芸術的に！
　だって、相手は僕らのルーイ。
　真夜中の王者だもの。
　月を盗むネコだもの。